

Cultured 文化
Healthy 健康
International 国際
Beautiful 美
Academia 千葉大学

Chiba University



Campus Master Plan 2012

千葉大学キャンパスマスタープラン 2012
日本一のキャンパスをめざして

「キャンパスマスタープラン 2012」策定にあたって

千葉大学は、1949年（昭和24年）、当時千葉県内にあった千葉医科大学、同大学附属医学専門部及び薬学専門部、千葉師範学校、千葉青年師範学校、東京工業専門学校、千葉農業専門学校の各旧制諸学校を包括して、新制の国立総合大学として創立されました。当初は、5学部（学芸学部、医学部、薬学部、工芸学部、園芸学部）と1研究所（腐敗研究所）及び附属図書館でスタートしましたが、現在は9学部、11の大学院研究科、他多数の教育研究センター等からなる総合研究大学へと発展してきました。



千葉大学長
齋藤 康

創立当初から、西千葉、亥鼻、松戸の3キャンパスの独自性を活かしながら、千葉県内唯一の国立大学として県内はもとより、国内外の教育・研究・医療の発展に寄与してきたと自負しています。

2004年（平成16年）の国立大学法人化後は、「つねに、より高きものをめざして」という大学の理念を定め、創造的な教育・研究・医療活動を通しての社会貢献を使命とし、生命のいっそうの輝きをめざす未来志向型大学として、たゆみない挑戦を続ける決意を新たにしました。

また、「千葉大学方式」として広く知られるようになった学生主体の環境ISO活動は、持続可能な社会を構築するための取組として、全国から大きな注目と期待を集めるまでになりました。千葉大学は学生が中心に存在する、そして機能している大学です。次世代を担う学生たちが貴重な体験を積み重ねることができる美しいキャンパスの実現は、大学に課された責務であり、今回策定した「キャンパスマスタープラン 2012」でも、その視点をまず、第一に考えました。

第二期中期計画期間の目標として掲げた、

- (1) 世界を先導する大規模総合大学として、その多様性と学際性を最大限に生かし、総合的で高度な個性ある教育プログラムと最善の環境を提供することにより、有為な人材を育成する。
- (2) 世界的な研究拠点を育成し、基礎研究から応用研究までを、自由な発想に基づき重層的に推進して、現代社会のさまざまな問題を解決するとともに、世界・日本・地域の文化と科学の発展に貢献する。
- (3) 国内外の地域社会、行政、教育研究諸機関あるいは企業等と連携し、国際化した知の発信拠点形成を推進するとともに、社会に積極的に貢献する。
- (4) つねに、より高きものをめざして、総合大学の多様な構成員が積極的に協働し、自律的に改革する、社会に開かれた大学を構築する。

を実現するためにも、キャンパス環境を計画的に整備し、創造的かつ高度な教育・研究・医療活動に資するスペースの確保と充実を推進していきます。

キャンパスマスタープランは、教育・研究・医療というソフトと、キャンパスというハードを結びつける重要な役割を担っています。学生、教職員、地域の方々、また、千葉大学に関わるすべての皆さんに愛されるキャンパスを実現するために、「キャンパスマスタープラン 2012」の策定を契機に、さらなる努力を続けていく所存です。

目次

「キャンパスマスタープラン2012」策定にあたって

目次

はじめに～キャンパスマスタープラン2012策定の主旨	1
1 キャンパスマスタープランの目標と計画ビジョン	
1-1 アカデミックプランを支えるキャンパスマスタープラン	2
1-2 アカデミックプランに対応した中長期的計画の必要性	2
1-3 キャンパスマスタープラン2012の目標と計画ビジョン	3
1-4 計画ビジョンの共有	4
2 キャンパスの基本整備方針	
2-1 基本整備方針の考え方～3つのS：Strategy, Sustainability & Safety	5
2-2 基本整備方針1：Campus Strategy：特色を活かす戦略的なキャンパスの実現	6
2-3 基本整備方針2：Campus Sustainability：美しい持続可能なキャンパスの実現	8
2-4 基本整備方針3：Campus Safety：安全・安心なキャンパスの実現	9
3 キャンパスの現状と課題	
3-1 キャンパスの現状	11
(1) 4キャンパスの位置	11
(2) 各キャンパスの現状	12
(3) キャンパスの安全性	13
(4) キャンパスのエネルギー消費	14
3-2 全学的な施設マネジメントの課題	15
4 キャンパス・フレームワーク	
4-1 フレームワークプランの基本となるゾーニング計画	16
4-2 西千葉キャンパス	17
4-3 亥鼻キャンパス	24
4-4 松戸キャンパス	30
4-5 柏の葉キャンパス	36
付1) 千葉大学の理念と目標（千葉大学憲章）	42
付2) 千葉大学環境方針	43
付3) キャンパスマスタープラン2012 今後のスケジュール	44
付4) キャンパスマスタープラン2012 検討ワーキンググループ委員	45
資料編	
① 西千葉キャンパス「現状と課題」	47
② 亥鼻キャンパス「現状と課題」	75
③ 松戸キャンパス「現状と課題」	103
④ 柏の葉キャンパス「現状と課題」	131



はじめに～キャンパスマスタープラン2012策定の主旨

千葉大学では、1994年（平成6年）9月22日評議会決定された「西千葉地区キャンパス整備計画大綱」において、西千葉地区キャンパスを総合的・統一的に再整備することを目的とし、施設の老朽化、非効率化、及びキャンパス全体の建て詰まり状況の解消、教育改革や予想される部局の新設・再配置等の施設整備への対応、将来の学問の質的・量的発展と機能的な教育研究活動の展開を可能にする良好な環境の創出、という視点からマスタープランが策定されていました。

しかし、既存建物の耐震改修を前提とした文部科学省の施設整備方針（第1次・第2次緊急整備5カ年計画）が実施されたこともあり、全面建替えを前提にしたマスタープランは実現性が乏しくなっていました。また、亥鼻・松戸・柏の葉の3キャンパスについては、全学で決定されたマスタープランとしての中長期計画は存在しませんでした。

こういった状況を踏まえ、各キャンパスの今後の整備方針、ゾーニング、交通計画をまとめた千葉大学キャンパス・フレームワークプランがキャンパス整備企画室によって作成され、2007年（平成19年）3月に部局長連絡会の了承を得ました。

2010年（平成22年）3月文部科学省は国立大学法人が個性や特色を活かした魅力あるキャンパスを実現していく必要があるとして、「今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議」の下に「キャンパス計画検討ワーキンググループ」を設置し、キャンパス計画の基本的な考え方や考慮すべき視点等をまとめた「戦略的キャンパスマスタープラン作成の手引き」を策定し、各国立大学法人に対してキャンパスマスタープランの作成を求めています。

そこで千葉大学では、キャンパスマスタープランを2010年（平成22年）から作成することといたしました。

キャンパスマスタープランは、キャンパスの中長期の計画的な整備の方針を定めるものですが、第二期中期計画にあるキャンパスの施設環境の整備や活用に関する具体目標を定める上でも非常に有効であり、教育・研究・医療の目標実現のためにも早期に策定することが求められました。2010年（平成22年）6月の部局長連絡会において、企画担当理事を主査とし、主要部局からの委員と、キャンパス整備企画室員、施設環境部員、合計23名で構成される「キャンパスマスタープラン検討ワーキンググループ」の設置が部局長連絡会で了承され、約1年半に渡りキャンパスマスタープランの検討を進めてまいりました。

今回策定したキャンパスマスタープランは、アカデミックプランを支え、長期的な視点からより良いキャンパス環境を実現するために、千葉大学の西千葉キャンパス、亥鼻キャンパス、松戸キャンパス、柏の葉キャンパスの4つの主要キャンパスのフレームワーク（キャンパスのあるべき骨格）を定めたものです。他のキャンパスについても、計画ビジョンやフレームワークの考え方は準用されることとなります。

このマスタープランに基づき、今後、中期的なアクションプランを策定して行きながら、千葉大学のキャンパス環境の整備を行っていきます。

千葉大学 理事（企画担当）・副学長
キャンパスマスタープラン検討WG主査
山本 恵司

1. キャンパスマスタープランの目標と計画ビジョン

1-1 アカデミックプランを支えるキャンパスマスタープラン

大学は、施設や環境を維持しながら、教育・研究・医療の成果をあげ社会貢献を実現していくことが求められる。キャンパスマスタープランは、キャンパス空間の計画目標を示し、中長期的な大学経営・運営に関わる施設と環境整備計画を意思決定するために必要な戦略的プログラムである。

千葉大学のキャンパスマスタープランは、千葉大学憲章、千葉大学行動規範、環境方針、中期目標・中期計画に掲げられた基本理念や計画のもとで実践されるアカデミックプランを支えるため、キャンパス全体の環境整備とその運用の観点から、長期的な視野とともに、中期的な目標達成のための計画を策定するものである。

1-2 アカデミックプランに対応した中長期的な計画の必要性

(1) 中長期的なフレームワークの必要性

キャンパス空間は、キャンパスが計画された時には予想できなかった環境や状況の変化が生じ、不確定な要素に対して柔軟に対応できることが求められる。しかしながら、さまざまな状況の変化に応じてキャンパス空間の形を変えていくことは、空間的な無理が生じたり、大学のイメージやキャンパスの調和や美しさを失い、長期にわたる計画的な整備が不可能になることにつながる。

また、大学のキャンパスは、その規模や量の大きさゆえに一度に全部を改修整備できるわけではなく、段階的に実行していくことになるため、キャンパスという空間に関わる長期的な戦略が不可欠である。

そのため、20年程度（中期計画3期分程度の中長期）の将来を見すえ、教育・研究・医療状況の部分的変化にも対応可能なキャンパスの骨格となるフレームワークを定める必要がある。加えて、計画の柔軟性と段階的な整備を反映させた中期的なアクションプランを策定し、この両者の相補的な関係の中でキャンパス空間を形づくっていくことが重要となる。（図1）

そのためにも、キャンパスの課題や問題点を徹底的に洗い出し、現状を正確に把握することによって、その場限りの解決策ではなく、抜本的な解決策を構成員らの十分な議論と合意のもとに、大学全体の将来戦略に合った骨格を示す計画案としてまとめる必要がある。

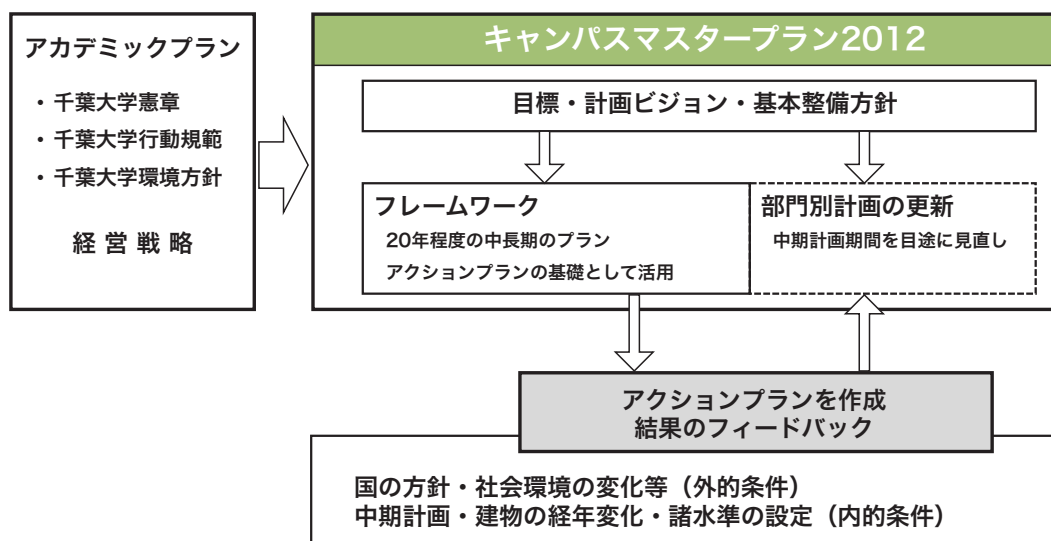


図1 キャンパスマスタープランの構成

(2) 中期目標・中期計画に対応したアクションプラン

中期のアクションプランは、大学の中期目標・中期計画に対応し、それを6年間で実現するための実行計画と、キャンパスや施設の整備計画、管理運営による施設マネジメント計画からなる。状況の変化や段階的整備に対応しなければならない部分は、フレームワークに整合するように定めるものである。このため、実行に伴う予算制度や体制を確立し、施設の計画・運営を実施するものが常に念頭に置くべき指針となる必要がある。

1-3 キャンパスマスタープラン2012の目標と計画ビジョン

千葉大学がめざすアカデミックプラン（千葉大学憲章、千葉大学行動規範、環境方針、中期目標・中期計画）を支え、千葉大学の理念である「つねに、より高きものをめざして」をキャンパス空間においても実行していくために、キャンパスマスタープランが目指すべき目標を

【日本一のキャンパス】とする。

この目標を、構成員全員が認識しその実現に向けて努力する。

キャンパスは、建物やサイン、緑など表面的な美しさをもたせるだけでは十分でなく、文化性、健康性、国際性、共同性など千葉大学がもつ内面のポテンシャルを合わせもって総合的に達成される。そのため、「日本一のキャンパス」を実現する具体的な計画ビジョンを以下の5つで構成するものとする。

- (1) 「国・地域・大学の文化を継承・創造し地域に貢献するキャンパス」の実現
- (2) 「健康的で環境を重視したキャンパス」の実現
- (3) 「国際的・学際的な交流拠点となるキャンパス」の実現
- (4) 「豊かな緑と建物群の調和がとれた美しいキャンパス」の実現
- (5) 「知的共同体を目指す学問の基盤となるキャンパス」の実現

(1) 国・地域・大学の文化を継承・創造し地域に貢献するキャンパス

千葉大学の大学憲章、行動規範には、千葉大学は「社会と文化の発展に貢献する」「地域文化の形成に寄与する」ことが謳われている。キャンパスの施設整備や運営にあたって、私たちは大学キャンパスを、将来を担う学生達の創造的思考を醸成する場所、地域社会の誇りとなる知の連携交流拠点、持続可能（サステイナブル）な社会のモデルとして創り上げていく必要がある。そのようなキャンパスが、千葉大学のキャンパス文化を創造する基盤であるといえる。

(2) 健康的で環境を重視したキャンパス

健やかで豊かな学生生活を実現するキャンパスは、多様な学生のニーズに対応し、アメニティが充実し健康的である必要があり、健康分野の教育研究も充実し環境ISO活動にも率先して取り組む千葉大学は、自然環境の維持・保全・再生を目指しながら、環境に配慮したキャンパス整備、環境負荷が少ないキャンパスと施設づくりを実現する。

(3) 国際的・学際的な交流拠点となるキャンパス

千葉大学は、国際化を推進し、世界的な研究拠点となることを、中期目標の中で謳っている。世界

に伍するトップレベルの教育研究拠点となるためには、国際的な評価に耐えられるキャンパス環境が必要であり、施設づくりが求められている。

また同時に、留学生の受け入れや、留学生の生活と学習を支えるキャンパス環境、国際共同研究や国際的に通用する人材の育成を支えるキャンパス環境を実現していかなければならない。

(4) 豊かな緑と建物群の調和がとれた美しいキャンパス

千葉大学は緑豊かなキャンパスとして学生・教職員に高く評価されている。キャンパスは、大学の資源としてだけでなく、周辺地域の環境資源としても、保全・活用していくべき重要な要素である。また、キャンパスが一体として美しく、建物群が緑と調和した美しい景観を構成していることは、キャンパスで長い時間を過ごす学生や教職員のアメニティ環境、癒しの空間を実現する上で非常に重要な視点である。

(5) 知的共同体を目指す学問の基盤となるキャンパス

千葉大学憲章の目標に「学ぶ喜びを生きがいと感じ、ともに成長していく知的共同体」がある。知的共同体の実現のために、構成員の自主性や自律性を重んじ、教育の効果を高める学習環境、安心して働ける職場環境、構成員のコミュニケーションの連鎖が生まれるような空間など、構成員にとってかけがえのない体験の礎となる豊かなキャンパスを実現する。

1-4 計画ビジョンの共有

キャンパスの計画ビジョンを、全ての構成員が共有できるように、CHIBAの頭文字一つずつに対応させて計画ビジョン【CHIBA】とした。(図2)。

- | | | |
|-----------------------------------|--------|-------------------|
| (1) 国・地域・大学の文化を継承・創造し地域に貢献するキャンパス | →文化のある | C : Cultured |
| (2) 健康的で環境を重視したキャンパス | →健康的で | H : Healthy |
| (3) 国際的・学際的な交流拠点となるキャンパス | →国際的な | I : International |
| (4) 豊かな緑と建物群の調和がとれた美しいキャンパス | →美しい | B : Beautiful |
| (5) 知的共同体を目指す学問の基盤となるキャンパス | →学問の場 | A : Academia |

Cultured 文化
Healthy 健康
International 国際
Beautiful 美
Academia 千葉大学

図2 計画ビジョン【CHIBA】

2 キャンパスの基本整備方針

2-1 基本整備方針の考え方 ～3つのS～： Strategy, Sustainability & Safety

キャンパスマスタープランの目標【日本一のキャンパス】と計画ビジョン【CHIBA】を実現するために必要なキャンパスの整備の考え方は、「戦略的であること」「美しく持続可能であること」「安全・安心であること」の3点である。

このような考え方から、キャンパスマスタープランの基本整備方針を、以下の3つにまとめた(図3)。

基本整備方針1－Campus Strategy【SⅠ：キャンパス戦略】

：特色を活かす戦略的なキャンパスの実現

基本整備方針2－Campus Sustainability【SⅡ：持続可能性】

：美しく持続可能なキャンパスの実現

基本整備方針3－Campus Safety【SⅢ：安全・安心】

：安全・安心なキャンパスの実現

基本整備方針の構成を図示すると図3のようになる。Campus Sustainability【持続可能なキャンパス】とCampus Safety【安全・安心なキャンパス】は、キャンパスの土台となるもので、各キャンパスに共通する基本整備方針である。その土台の上に、キャンパスごとにCampus Strategy【戦略的なキャンパス】を組み立てるという構成になる。



図3 キャンパスマスタープラン基本整備方針の構成

また、これらの基本整備方針は、文部科学省の政策諮問会議「今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議」が2011年（平成23年）8月に提言をまとめた、「知の拠点—我が国の未来を拓く国立大学法人等施設の整備充実について～新たな価値を生み出すキャンパス環境の創造・発展～」基本的な考え方にも合致するものでもある。

その提言では、中長期的視点に立った計画的・重点的な施設整備の推進が必要であり、その基本的な考え方を以下の3点にまとめている。

- 質的向上への戦略的整備 —Strategy
- 地球環境に配慮した教育研究環境の実現 —Sustainability
- 安全な教育研究環境の確保 —Safety

2-2 基本整備方針1－Campus Strategy：特色を活かす戦略的なキャンパスの実現

千葉大学の主な4キャンパスは、以下に示す学部と研究センターで構成されており、それぞれの学部に対応した大学院研究科（融合科学研究科・専門法務研究科を含む）がある。各キャンパスは、その構成組織に対応したアカデミックプランの特色を有している。

- 西千葉キャンパス：文学部・教育学部・法経学部・理学部・工学部・普遍教育センター
環境リモートセンシング研究センター・分析センター・総合メディア基盤センター・先進科学センター・国際教育センター・マルチキャリアセンター・言語教育センター・フロンティアメディカル工学研究開発センター・地域観光創造センター・アカデミックリンクセンター・ベンチャービジネスラボラトリー・産学連携知的財産機構・上海交通大学国際共同研究センター
- 亥鼻キャンパス：医学部・薬学部・看護学部・医学部附属病院・看護実践研究指導センター
真菌医学研究センター・バイオメディカル研究センター
社会精神保健教育研究センター・未来医療教育研究センター
- 松戸キャンパス：園芸学部
- 柏の葉キャンパス：環境健康フィールド科学センター・予防医学センター

西千葉キャンパスは、医・薬・看護・園芸以外の文系・理系学部で構成されており、大学本部のある千葉大学メインキャンパスである。亥鼻・松戸キャンパスの学部学生に対する普遍教育（教養教育）は西千葉キャンパスで実施されている。

「現代社会のさまざまな問題を解決するとともに、世界・日本・地域の文化と科学の発展に貢献する。」という千葉大学・中期目標の一つを達成するために、多様性と学際性を最大限に生かして文理融合による持続可能な社会構築に向けての教育研究が行われている。

亥鼻キャンパスは、薬学部の西千葉キャンパスからの最終移転が2011年（平成23年）9月に完了した。これにより、医学部・看護学部・薬学部による学際型の教育研究を推進し、チーム医療への理解を深め、自律した医療組織人の育成を行う専門職連携教育（Inter-Professional Education：IPE）の体制が整い、医学部附属病院と一体となった人間の生命と健康を探究するキャンパスとして位置づけることができる。また、学部として看護学の教育研究を行っているのは国立大学法人では千葉大学のみである。

松戸キャンパスには、国立大学法人の中で唯一の園芸学部と園芸学研究科があり、その教育・研究の対象は多岐に渡っており、都市と深い関わりを持つ園芸農業と緑環境に関する教育研究が行われているキャンパスである。キャンパスの約半分を占める教育研究圃場や、フランス式庭園、イタリア式庭園などがあり、隣接する戸定が丘歴史公園と共に、松戸市の保存緑地の一翼を担っている。

柏の葉キャンパスは、1991年（平成3年）に園芸学部の附属農場として整備された比較的新しいキャンパスである。国立大学の法人化に先立つ2003年（平成15年）医学・薬学・教育学・看護学・園芸学・工学等を領域横断的に結び、環境・健康・食に関する研究を行う拠点として、環境健康フィールド科学センターが設置された。2004年には東洋医学診療所も併設され、2007年（平成19年）に設

置された予防医学センターとともに、予防医学の研究拠点ともなっている。教育面では、主に園芸学
研究科の大学院教育の一部を担うと共に、環境配慮型都市開発が進む柏の葉地域における新しい形の
生涯学習（カレッジリンクプログラム）の拠点ともなっている。

以上のことから、各キャンパスのアカデミックプランの特色を、

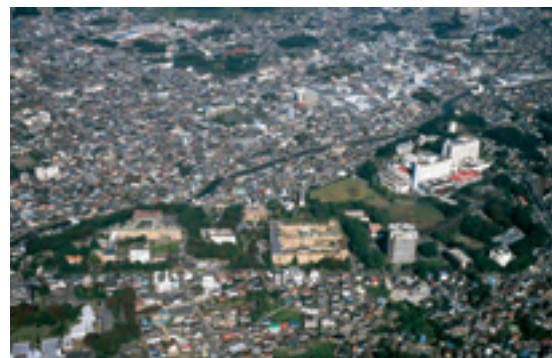
- 西千葉キャンパス：持続可能な社会と環境を科学するキャンパス
- 亥鼻キャンパス：生命と健康を科学するキャンパス
- 松戸キャンパス：食と緑を科学するキャンパス
- 柏の葉キャンパス：環境・健康・食の学際研究キャンパス

として整理し、これらの実現のために、戦略的にキャンパスを整備し、フレームワークを作成するこ
とを第一の基本整備方針とする。

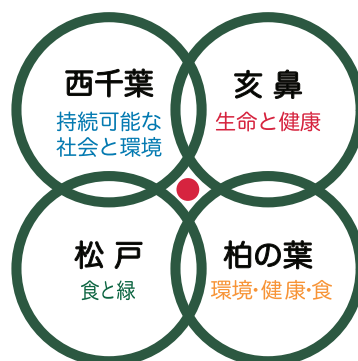
また、各キャンパスの学際的連携が、教育・研究・医療の重要戦略であることを認識して、フレーム
ワークを作成することとした。



西千葉キャンパス



亥鼻キャンパス



松戸キャンパス



柏の葉キャンパス



2-3 基本整備方針2 - Campus Sustainability : 美しく持続可能なキャンパスの実現

大学は、長期にわたって組織、施設、環境の整備が行われ、教育という人材育成と、研究成果の社会還元を使命として、組織や資産をマネジメントしながら持続的に発展していくことが求められている。また、社会的責任として地球環境問題への貢献が強く求められている。

千葉大学では2007年（平成19年）に、国立大学法人としては日本で初めて主要4キャンパスにおいて「環境マネジメントシステム（ISO14001）」の認証を受け、学生を主体とした取得以降の取組においても、多方面から高い評価を得てきた。大学キャンパスは、環境問題に対する生きた実験の場であり、同時に教育の理想的な教材でもある。

このような背景のもと、千葉大学は、(1)「省エネ・創エネによるエコキャンパス」の実現、(2)「緑溢れるキャンパスの維持と交流空間（パブリックスペース）」の実現、(3)「歴史遺産の継承」の実現、(4)美しいキャンパスの実現によって、環境問題だけでなく、社会的側面、経済的側面とのバランスの上で、持続可能（サステイナブル）なキャンパスを目指すことを第二の基本整備方針とする。

(1) 省エネ・創エネによるエコキャンパスの実現

現在、消費電力の削減、温室効果ガス排出削減に資する対策など、エネルギー供給や地球環境に配慮した施設整備は重要な課題となっており、特に教育・研究・医療で先進する国立大学においては、最優先に取り組むべき課題の一つである。環境活動に先進的な千葉大学の環境方針においても、「省エネルギー・省資源、資源の循環利用の徹底」が謳われており、経年劣化等により省エネ性能の著しく低い老朽施設のエコ再生に加え、新たな施設整備においても、省エネルギー、地球環境への配慮を前提として、環境への負荷が少なく持続的発展が可能な社会を目指したエコキャンパスを実現する必要がある。

また、東日本大震災以降、災害時においても教育・研究・医療活動を停止させないよう、大学内でエネルギー創出の必要性が提唱されており、自然資源を活用した再生可能エネルギーの創出に取り組むとともに、エネルギー安定供給のための幹線計画を早急に検討する必要がある。

さらに、キャンパス内の自動車・自転車の総量規制を考慮しながら、公共交通機関利用促進による環境負荷の軽減も考えていく必要がある。

これらの施設整備は、長期的展望のもと省資源、省エネルギーに関する管理運営面での積極的な取り組みと合わせて一体的に実現する。

(2) 緑溢れるキャンパスの維持と交流空間（パブリックスペース）の充実

千葉大学は良好な緑資源に恵まれており、緑地が急激に減少していく都市部において、豊かな自然環境形成に必要不可欠な場所となっている。環境活動に先進的な千葉大学の環境方針においても、「構内の緑を保全し、環境負荷の少ない緑豊かなキャンパスを実現する」としており、これらの緑を大学施設整備、開発と調和を図りながら、適切に保存・維持・管理していく、一体的な整備を実現する。

また、総合大学である千葉大学は、様々な教育・研究・医療内容にふさわしい機能を備えると共に、異なる教育・研究・医療分野が横断的な交流を行える、ゆとりと潤いのある交流空間「（パブリックスペース）を提供する必要がある、マスタープランにおいて、豊かな緑資源を活かした千葉大らしい個性あるパブリックスペースの設置を実現する。さらに、統一されたサイン計画を立案し、段階的な整備を行っていくこととする。

(3) 歴史遺産の継承

千葉大学には、後世に残すべき近代の都市遺産としての建造物や環境など資源が存在しており、地域からも保存の要望がある。大学と地域の歴史を象徴するこれらの建造物や環境が、今後、無計画な開発によって失われないよう、残すべきものを歴史遺産として位置づけ、保全し、キャンパス文化を継承していく必要がある。

(4) 美しいキャンパスの実現

キャンパスマスタープラン 2012 が目標とする【日本一のキャンパス】の実現には、現在のキャンパス景観を改善するための、建物や外部空間のデザインガイドラインと維持管理ガイドラインの制定、わかりやすいサイン計画などを早急に実行に移していく必要がある。

これらは今後作成が予定されているアクションプランの中で、具体的に検討していくものとする。

2-4 基本整備方針 3 - Campus Safety : 安全・安心なキャンパスの実現

学生の学問の場、教職員の教育・研究・医療の場として長い時間を過ごすキャンパスが、安心・安全であることが根本であることはいうまでもない。千葉大学のマスタープランでは、キャンパスの役割として、(1)「災害に強いキャンパス」の実現、(2)「事故のない安全・安心なキャンパス」の実現を、第三の基本整備方針とする。

(1) 災害に強いキャンパスの実現

地震大国の日本では、キャンパスの耐震化やインフラ対策、防災への対応は不可欠となっている。また、東日本大震災では、災害時の復旧支援拠点としてのキャンパスの重要性、原子力発電所事故に起因する節電対応、教育・研究・医療活動の持続性の課題が浮き彫りになり、これらが重要な計画課題であることが改めて認識された。

第3次国立大学等施設整備5カ年計画では、大学の老朽施設の再生を最重要課題とし、安全・安心な教育・研究・医療環境を確保するため耐震改修整備を図ることが提言されているが、千葉大学においては、耐震改修を鋭意進めているところである。

キャンパス・施設の安全性の確保は、学生の学問の場、教職員の教育・研究・医療の場としての基盤であり、今後、経年によって増加する老朽改善需要への対応、設備インフラの強化、災害時の非構造部材（2次部材）の落下・転倒防止、エネルギー確保を検討しながら、災害に強いキャンパスを実現する。また、災害時における地域の新たな役割として大学キャンパスのあり方を追求し、大学が地域社会とともに震災にどのように備えていくのかを合わせて考えなければならない。学内帰宅困難者への対応策や、備蓄庫の整備などと合わせて検討していくこととする、

(2) 事故のない安全・安心なキャンパスの実現

大学における良好な教育・研究・医療環境の場を安心して過ごすには、事故のないキャンパスや施設が大前提である。千葉大学行動規範においても、「安全かつ快適な学習環境・施設や職場環境」の整備が謳われおり、研究活動、日常生活、通勤通学時に起こりうる事故の防止に努めることが求められる。

キャンパス内での窃盗や不審者等の犯罪抑止に効果のある施設整備、危険物・汚染物の適切な処理施設の整備、多くの自動車・自転車・歩行者が安全に移動できる交通整備、バリアフリー整備などを適切に計画し、安全・安心なキャンパスを実現する。

以上、キャンパスごとに検討してきた基本整備方針1・2・3の特長と構成を図示すると図4のようになる。



図4 キャンパスマスタープラン基本整備方針の特長と構成

3 キャンパスの現状と課題

3-1 キャンパスの現状

(1) 4キャンパスの位置

千葉大学の主要4キャンパスは、西千葉、亥鼻、松戸、柏の葉と、千葉県西部に点在している。本部のある西千葉キャンパスからの直線距離は、亥鼻キャンパスまで約4km、松戸キャンパスまで約25km、柏の葉キャンパスまでは約33kmである(図5)。

園芸学部1・2年次の学生は、松戸キャンパスと西千葉キャンパスを往復するが、公共交通機関の乗り換えが多く、西千葉駅(総武線)ー松戸駅(常磐線)間は、西船橋(武蔵野線)、新松戸(常磐線)経由で約1時間を要する。自動車を用いる場合、京葉道路を経由して約1時間を要する。

また、西千葉駅(総武線)ー柏の葉キャンパス駅(つくばエクスプレス)間は、西船橋(武蔵野線)、南流山(つくばエクスプレス)経由で約1時間を要する。自動車を用いる場合、国道16号線を経由して約1時間15分を要する。



図5 4キャンパスの位置

(2) 各キャンパスの現状

千葉大学は主要4キャンパス（西千葉・亥鼻・松戸・柏の葉）において、敷地面積980,847㎡、建物面積483,423㎡を保有し、そこで活動する構成員（学生、教職員、附属学校生徒、留学生）は計20,541人にのぼっている。

キャンパス別に比較すると、建物保有面積では西千葉、亥鼻キャンパスの保有面積が最も高く計444,258㎡（91.9%）を占め、建物のほとんどが両キャンパスに存在している（図6）。松戸、柏の葉では建物保有面積は少ないが、圍場等の屋外スペースの敷地に占める割合が高い。構成員比では西千葉が全体の72.4%を占めている（図7）。

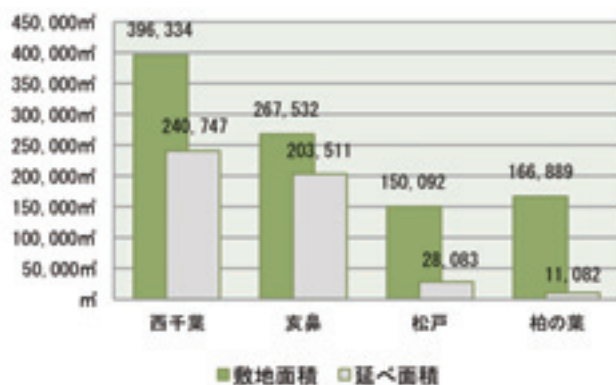


図6 主要4キャンパス敷地・建物保有面積
＜平成23年度施設実態報告より＞

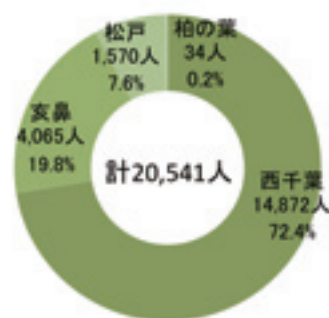


図7 主要4キャンパス構成員比
＜千葉大学概要2011より＞

各キャンパスの主要データを表1に示す。

表1 主要4キャンパスの主要データ（2011年5月1日現在）

主要4キャンパス	西千葉		亥鼻		松戸		柏の葉		
航空写真									
敷地面積	980,847㎡	396,334㎡	40.4%	267,532㎡	27.3%	150,092㎡	15.3%	166,889㎡	17.0%
建築面積	144,861㎡	75,246㎡	51.9%	47,910㎡	33.1%	12,786㎡	8.8%	8,919㎡	6.2%
延床面積	483,423㎡	240,747㎡	49.8%	203,511㎡	42.1%	28,083㎡	5.8%	11,082㎡	2.3%
建ぺい率	-	19.0%	17.9%	8.5%	5.3%				
容積率	-	60.7%	76.1%	18.7%	6.6%				
構成員	20,541人	14,872人	72.4%	4,065人	19.8%	1,570人	7.6%	34人	0.2%
教員数	1,312人	763人	58.2%	459人	35.0%	73人	5.6%	17人	1.3%
職員数	1,576人	371人	23.5%	1,170人	74.2%	18人	1.1%	17人	1.1%
学部生	10,765人	8,476人	78.7%	1,419人	13.2%	870人	8.1%	0人	0.0%
大学院生	3,801人	2,504人	65.9%	857人	22.5%	440人	11.6%	0人	0.0%
研究生等	612人	483人	78.9%	82人	13.4%	47人	7.7%	0人	0.0%
生徒児童数	1,450人	1,450人	100.0%	0人	0.0%	0人	0.0%	0人	0.0%
留学生数	1,025人	825人	80.5%	78人	7.6%	122人	11.9%	0人	0.0%

※キャンパス現況についての詳細は資料編を参照。

(3) キャンパスの安全性

千葉大学では、施設緊急整備5か年計画に基づき、計画的に耐震改修が行われている。現在、千葉大学全体での要耐震改修面積は76,324㎡（15.1%）あり、今後、早急に耐震改修を完了する必要がある。

(図8)

今後の耐震改修が必要な面積をキャンパス別に見ると、西千葉キャンパスでは全体の10.7%（25,739㎡）が未完了である。亥鼻キャンパスでは全体の22.1%（44,615㎡）であり、医学部本館など主要な建物の耐震改修が未完了である。松戸キャンパスでは15.6%（4,187㎡）が未改修となっている。柏の葉キャンパスは、設置年度が新しいため、現在のところ機能改修・耐震改修が必要な建物はない。(図9)。

また、建物老朽化に伴い、機能改修が必要な建物面積は全体の36.8%（185,525㎡）となっており、要耐震改修面積よりも多い割合である(図8)。今後は、老朽度等により改修の優先順位を定めるなど計画的な整備を進め、安全かつ教育・研究のニーズに沿った施設整備を進めていく必要がある。さらに、経年により建設後25年以上が経過する建物の増加に備えた改修計画や、建物の歴史的価値を尊重した改修計画の検討を進める必要がある。

災害に強いキャンパスの実現には、電気・水道・ガス・情報等のインフラ整備が必要であるが、部分的に整備されているものの、全てのキャンパスにおいて計画的な整備が行われているとは言えない。建物開発に影響されない計画的な共同溝の整備を行い、建物開発・メンテナンス・復旧に柔軟に対応できる共同溝の整備が必要である。

事故のない安全なキャンパスの実現のためには、各キャンパスの状況に応じて、交通計画、防犯、バリアフリーなどの対策を講じていくことが重要である。特に交通計画においては、歩車分離や自転車事故防止等の対策が必要不可欠である。

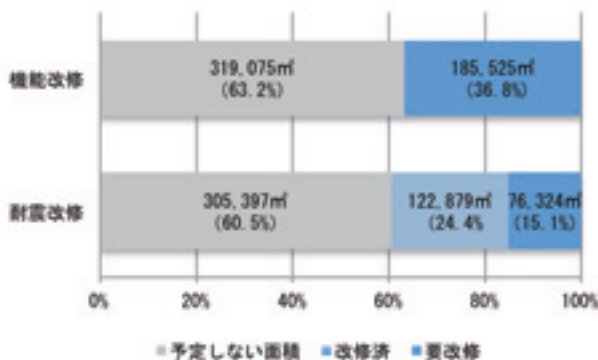


図8 要機能・耐震改修面積（全学）



図9 要耐震改修面積（主要4キャンパス）

※ キャンパスの安全性に関する現況詳細は資料編を参照

※ 各面積には職員宿舎は含んでいない。

(4) キャンパスのエネルギー消費

千葉大学の主要4キャンパスのエネルギー使用量は806,328GJで、34,256t-CO₂のCO₂を排出している。エネルギー使用量は2004年(平成16年)から2006年(平成18年)にかけては減少したが、それ以降は増加傾向にあり(図10)、今後の国立大学の運営交付金の縮小、電力不足を考えると、教育・研究・医療活動の質を担保しつつ、全学をあげて省エネルギー対策に取り組む必要がある。

エネルギー使用量の構成比は(図11)、亥鼻キャンパスの医学部附属病院が全体の45.7%と約半数を占めている。次いで西千葉、病院を除く亥鼻、松戸、柏の葉の順になっている。

西千葉キャンパスのエネルギー使用量は245,211GJと主要キャンパスの中では高いが(図11)、原単位では1,048MJ/m²と最も低い(図12)。

病院を除く亥鼻キャンパスのエネルギー使用量は、薬学部移転により今後増加すると見込まれる。現在のエネルギー使用量原単位を見ると4キャンパスの中では松戸キャンパスと並び高い値である。

松戸キャンパスのエネルギー使用量原単位は病院を除く亥鼻とほぼ同じである。

柏の葉キャンパスのエネルギー使用量は7,456GJであるが、今後、植物工場等の増加にあわせて、エネルギー使用量も増加すると考えられる。

附属病院のエネルギー使用量は368,549GJであり、原単位は3,749MJ/m²と最も高い。エネルギー使用量は増加しており、今後の新棟建設も踏まえた省エネ対策の検討が必要である。

※キャンパスのエネルギー消費に関する現況詳細は資料編を参照

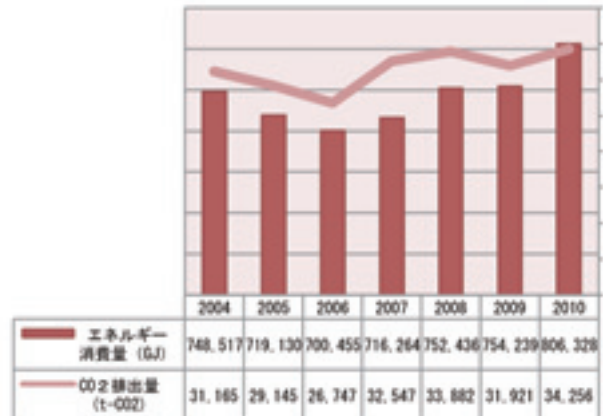


図10 エネルギー使用量とCO₂排出量の推移

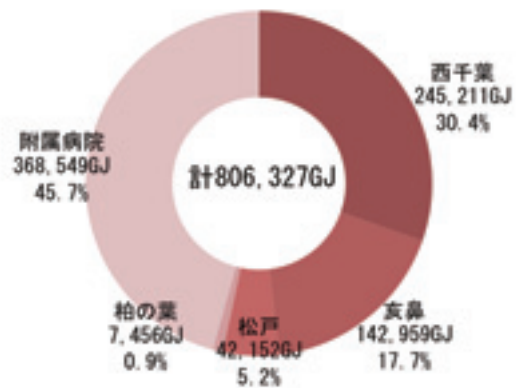


図11 エネルギー使用量のキャンパス別構成比(2010年度)

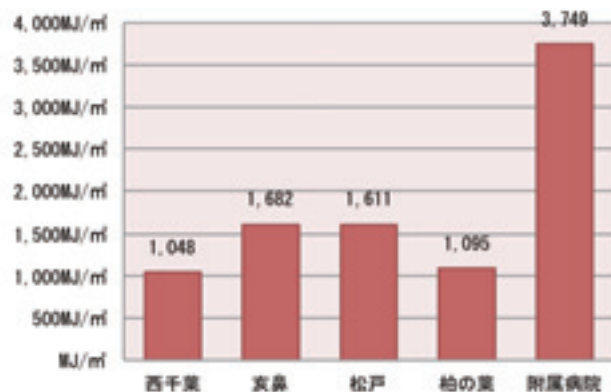


図12 エネルギー使用量原単位(2010年度)

3-2 全学的な施設マネジメントの課題

キャンパス整備計画や運用・維持管理、保全にあたっては様々な課題が存在しているが、アカデミックプランと密接に連携したキャンパスマスタープランの策定により、現状の把握や課題を抽出し、改めて大学としての意志を全学的に理解・浸透させることによって、その解消を図る必要がある。

(1) 中長期的ビジョンの共有

これまでの施設は個々の課題に対して、ともすれば必要最小限の場当たりの整備に陥り、結果的に教育・研究・医療上、非効率な施設運用を強いられることもあった。マスタープランによって長期的教育研究戦略を明文化し、教育・研究・医療分野のつながりを踏まえつつ、選択と集中による効率的なキャンパス・施設整備をめざす。

また、学生の視点に立った魅力あるキャンパスや施設とするため「変えてはいけない部分」と「変えるべき部分」を明確にし、交流や憩い、緑の空間を確保する。

千葉大学では、一定程度の建物耐震化が進んだ一方、老朽狭隘対策は限定的だった。また、ライフライン基盤の耐震化・老朽解消・機能向上も遅れており、中期的施策の指針としてアクションプランの策定が求められる。

(2) 効率的な施設運用

千葉大学の面積的施設整備率は全国平均レベルにあるが、教育研究者によるスペース不足の声は絶えない。反面、利用率の低い部屋が存在することも事実である。「NetFM 施設状況調査」により利用状況を把握しているが、システムの強化と経営層のリーダーシップのもとでの実地調査や是正・再配分を行なう体制が必要である。

限られた財政の中で、経営資源としての施設を良好な状態に維持するためには、現存する老朽設備の重点的整備を実施し、費用的に安定した維持管理・更新、予防保全が可能な定常状態としトータルコストの低減をめざす。

良好な施設の維持には日々の保守が不可欠であり、管理者の意識向上、きめ細やかなサービスの確保、かつ経営方針や合理性などを踏まえつつ、管理体制について分散・集約や人的投資の効果、管理運営指針の設定などを検討する必要がある。

(3) 経営戦略との整合確保

キャンパスマスタープランの確実な実現のためには、整合の取れたアクションプラン（施設の整備計画等）の立案と、整合性の点検が求められる。また、それらを担保するための、経営層も巻き込んだ仕組みや、全学横断的に意志共有を維持する仕組みが重要となる。さらに、必要に応じて学生や地域住民など第三者による評価を受けることも検討する。

(4) キャンパスマスタープランの見直しと改善

キャンパスマスタープランは施設整備の礎となる普遍的なものであるが、長期にわたる運用の中で、社会的情勢の変化やアカデミックプランの見直し等があった時には柔軟に対応して、発展的に成長させる。キャンパスマスタープランの見直しにあたっては、戦略的判断とリーダーシップおよび継続的な相互理解が不可欠で、これを担うシステムが本キャンパスマスタープランの運用開始当初から必要である。

4 キャンパスのフレームワーク

4-1 フレームワークの基本となるゾーニング計画

キャンパス空間がめざすべき目標【日本一のキャンパス】と計画ビジョン【CHIBA】を実現するにあたっては、3つの基本整備方針に基づきながら、将来にわたっても継承すべき「長期にわたって変わらないキャンパスのフレームワーク（骨格）」と、中期目標・中期計画等に対応しながらキャンパスを戦略的に活用できる「変化に対応可能な部分」を組み込んだゾーニングを設定することが重要である。

マスタープランにおける各キャンパスのフレームワーク作成にあたっては、各キャンパスの普遍性の高い空間要素を活かしつつ、学生・教職員・来訪者の誰にとっても、わかりやすく利用しやすい明快な教育研究スペース・共同利用スペース・交流スペースのゾーニングを行うことが重要である。

具体的には、

- 主たるアプローチ直近に構成員同士の交流や、地域との連携を促進する交流ゾーンを整備する。
- 交流ゾーンをとりまく形で、福利厚生施設、講義室群などの共同利用ゾーンを形成し、キャンパス全体の利便性を高める。
- 各学部から共同利用ゾーン、交流ゾーンへのアクセスを容易にするため、共同利用ゾーンをとりまく形で教育研究ゾーンを形成する。



図 13 ゾーニングの基本形

という考え方のもと、図 13 のようなゾーニングを基本の考え方とした。

各キャンパスのフレームワーク作成にあたっては、現状のゾーニング特性を生かしながら、基本整備方針 1（Campus Strategy）に掲げられた教育研究戦略を支える環境を実現することを第一の目標とし、現状の課題を整理するとともに、修正すべきところは段階的に基本ゾーニングへの転換がはかれるように中期・長期の視点から対策を提示した（図 14）。

同時に、基本整備方針 2（Campus Sustainability）と基本整備方針 3（Campus Safety）における課題と対策も検討している。

	西千葉キャンパス	友麻キャンパス	松戸キャンパス	柏の葉キャンパス
キャンパス計画				
キャンパス計画				
キャンパス計画	門から遠いところにある共同利用ゾーンをできるだけ交流ゾーン付近に配置できるように段階的に整備する。南門周辺に交流ゾーンを整備する。	教育研究ゾーンと附属施設ゾーンの物理的距離を縮めるため、運動場ゾーンの一部を教育研究ゾーンへ転換することを検討する。正門周辺の共同利用ゾーンの一体化を図る。	現北門を正門とするゾーニングとし、交流ゾーンの整備充実を図るとともに、居住施設ゾーンの一体化を検討する。	正門から西門へとつながるゾーンを交流ゾーンとして整備する。

■ 教育研究ゾーン ■ 共同利用ゾーン ■ 地域連携交流ゾーン ■ 附属施設ゾーン ■ 運動場ゾーン ■ サービスゾーン ■ 居住施設ゾーン

図 14 キャンパスゾーニングの現状と将来像

4-2 西千葉キャンパス～持続可能な社会と環境を科学するキャンパス～

(1) 特色を活かす戦略的なキャンパスの実現

Campus Strategy ①：西千葉キャンパスの特色を活かすゾーニング計画

基本整備方針1に基づき、「持続可能な社会と環境を科学するキャンパス」を支える環境の実現をめざし、その将来ゾーニング計画を立案した。

千葉大学のメインキャンパスでもある西千葉キャンパスでは、1963年（昭和38年）から始まる鉄筋コンクリート造校舎群の建設を端緒とし、建物の南面配置を基本とした現在のキャンパスの骨格ができあがっている。今後大きくこの骨格を変更する必要はないと考えられるが、今回のキャンパスマスタープラン作成を契機として、改めて基本形となるゾーニングとの差異を確認しながら、将来にわたって継承すべきキャンパスの普遍的要素を明らかにし、さらに、時代の変化やニーズに戦略的に対応できるゾーニング計画を行うことが必要である。図15は、西千葉キャンパスの現況ゾーニングを示したものであるが、基本ゾーニングの考え方に照らし合わせると、いくつかの検討すべき事項が見いだされる。



交流ゾーンに関しては、現在、大多数の人々が利用するJR西千葉駅直近の南門周辺に、交流ゾーンが存在していない。特に、この場所に大学の情報提供機能がないことで、入試情報を得るために訪れる高校生、産学連携の情報を得たい企業、研究室を訪れる人々にとっては、非常に不親切なキャンパスとなっている。千葉大学全体の活動を広く社会にアピールしていくためにも、ここにインフォメーションセンターを整備することは、千葉大学の広報戦略の観点からも重要である。



図15 西千葉キャンパス現況ゾーニング

共同利用ゾーンに関しては、普遍教育教室群で構成される共同利用ゾーンと、中心部の共同利用ゾーン（図書館・福利厚生施設）が離れて存在している。多くの学生が集まる図書館、福利厚生施設群と普遍教室群が一体のゾーンとなっていないことが、安易な自転車移動の原因ともなり、時間によってそれぞれのゾーンでの自転車混雑を引き起こしていると考えられる。また、普遍校舎群が南門から離れた位置にあることも、学内移動のみの自転車が増加する一因になっている。

数年の内にこの問題を解消することは現状では困難であるが、将来、文系教室群や普遍教室群の再開発が必要となった時には、共同利用ゾーンの一体化を考慮していく必要がある。

一方、食堂施設は約 39ha あるキャンパスの一箇所に集中しており、今後分散化を検討していく必要がある。

教育研究ゾーンに関しては、西千葉駅正面に位置する教育学部附属幼稚園が、教育学部本体と離れた場所にあること、また、附属幼稚園の場所が、将来大学の顔として別用途整備が可能な場所である事を考えると、附属幼稚園の将来の移転先について今後検討していく必要がある。ただし、移転の検討にあたっては、園児の歩行能力・体力等への配慮や、豊かな園庭環境を確保することを考慮する必要がある。

また、今後ますます重要になる産学連携の拠点が、ゾーンとしてのまとまりがなく、キャンパス内に点在していることも、解決を図っていくべき問題である。

さらに、西千葉キャンパス東側に隣接し、移転が決定している東京大学生産技術研究所西千葉実験所（以下、東大生研）敷地に関しては、その一部を千葉大学が利活用する方策がないかを含めて検討していく必要がある。

これらに加え、教育研究戦略の変化にも対応可能な土地利用計画を考慮しながら将来ゾーニング（図 16）を検討した。

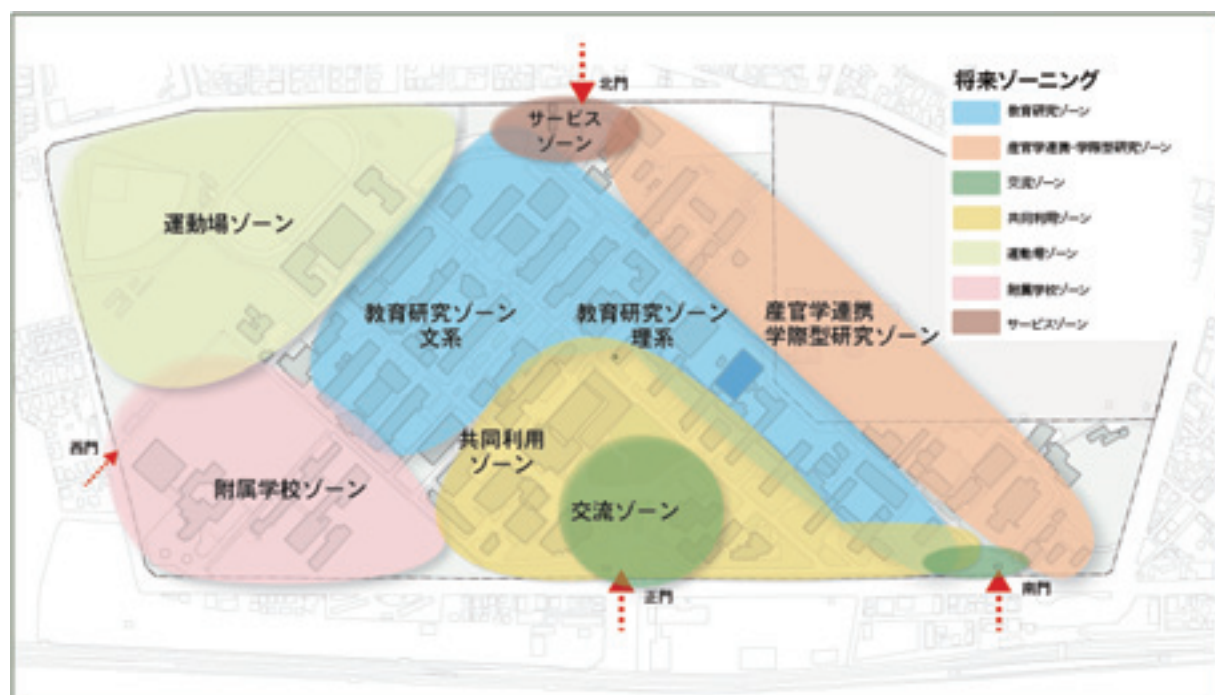


図 16 西千葉キャンパス将来ゾーニング

Campus Strategy ②：教育研究戦略等の変化にも対応可能な土地利用計画

西千葉キャンパスの土地利用計画作成にあたっては、大学の教育研究戦略・産学連携戦略・地域連携戦略などの側面から考えていく必要がある。

● 教育研究戦略におけるキャンパスの課題

旧薬学部建物群の利活用方法と、すでに耐震改修を終えている工学部の機能改善をどのように行っていくかが大きな課題となっている。

2012年度（平成24年度）には、工学部12号棟の建替え計画が認められる予定であり、それに続く工学部全体の再開発計画を立案しておく必要がある。計画にあたっては、建物の高層化、教室群の共同利用化、騒音や振動を発生する実験施設の配置計画などを同時に検討するとともに、東大生研移転後の敷地の一部利用も視野に入れた複数案を比較しながら方針を決定していく必要がある。

旧薬学部建物群の利活用に関しては、キャンパス内の建物改修や整備事業の際の一時移転場所として利用することを最優先としながら、園芸学部の狭隘化解消、さらに、プロジェクト研究等に対応可能な競争的スペースとして活用していく。あわせて、学際型研究や産学連携研究の拠点として、建物の高層化を含めた今後のあり方について検討していくこととする。

● 産学連携・地域連携戦略におけるキャンパスの課題

2011年度（平成23年度）にJST（独立行政法人科学技術振興機構）の補助金によって、旧薬学部2号館ならびに旧エネルギーセンター棟を利用した、千葉大学サイエンスパークセンター（CSPC）が完成した。しかし、産学連携・知的財産機構やVBL（ベンチャービジネスラボラトリー）とは離れた位置にあるため、千葉大学における産学連携の拠点がどこにあるのかが不明確になっている。できるだけ産学連携研究ゾーンをひとまとめにし、外部に対してアピールしていくことが重要である。大きな連携研究成果をあげていくことができれば、附属幼稚園の敷地を利用した駅至近の産学連携拠点を含んだ交流ゾーンの形成なども現実味を帯びてくると考えられる。

地域との連携課題としては、児童減少によって施設面積にゆとりの出てきた千葉市立弥生小学校の利活用計画立案への参画を求められていることから、教育学部を中心に検討を進めていくこととする。

(2) 美しく持続可能なキャンパスの実現

Campus Sustainability : キャンパスの持続可能性

基本整備方針2に基づき、①省エネ・創エネによるエコキャンパスの実現、②緑溢れるキャンパスの維持と交流空間の実現、③歴史遺産の継承、④美しいキャンパスの実現をめざす。

特に、西千葉キャンパスでは、東日本大震災直後の計画停電が大学運営に大きな影響を与えたことから、再生可能エネルギーや非常電源装置の導入などを含む、多様なエネルギー源の確保を検討し、エネルギーの安定供給をめざすと共に、給排水・情報系を含むライフラインや共同溝整備を進めていく。

また、創立50周年を機に整備された「かたらいの森」と、そこから連続する創立当初からのケヤキと桜の並木道「やよい通り（仮称）」は、西千葉キャンパスを象徴する緑の景観として、このゾーンをマスタープランの**目標【日本一のキャンパス】と計画ビジョン【CHIBA】**を体現するシンボリック空間として位置づけ、その景観を保全していくものとする（図17）。同時に、図書館屋上にある「やよいの鐘」を、あらためて千葉大学のシンボルとしてクローズアップし、取付位置を含めた検討を進めていく。

一方、キャンパス全体に広がる緑の保全・維持に関しては、むやみに緑の量を増やしていくのではなく、維持・管理ができる体制を整え、計画的に美しいキャンパス景観の実現をめざしていくものとする。



図17 西千葉キャンパス景観保全ゾーンの検討

表2 西千葉キャンパスの課題と対策

西千葉～持続可能な社会と環境を科学するキャンパス～					
	項目	課題	中期的な対策	長期的な対策	
Campus Strategy キャンパス戦略 (S I)	1. 交流ゾーン	・南門周辺の交流ゾーン欠如	・インフォメーションセンター設置による広報強化 ・南門周辺のパブリックスペース計画の立案	・松韻会館・附属幼稚園・工学部3号・4号棟エリアの再開発整備による交流施設整備	
	2. 共同利用ゾーン	・共同利用ゾーンの分散 ・共同利用施設の拡充 ・食堂施設の一極集中	・キャンパス東側での食堂整備検討	・文・法経校舎、普遍教育校舎建替時での対応 ・工学部エリア再開発整備による福利施設の整備	
	3. 教育研究ゾーン	・薬学部跡地の利活用	・旧薬学部1号館耐震改修要求 ・園芸学部の利用 ・学際型研究ゾーン形成		
		・工学部再開発	・12・19号棟改築 ・工学部ゾーン再開発計画の立案	・再開発整備 ・東大生産研移転後の一部敷地移管の検討	
		・老朽施設の機能改善	・法経学部2号棟、工学部2・21号棟、理学部5号館、総合校舎G号館、学内共同研究センター、体育施設、課外活動施設等		
		・産学連携ゾーンの分散		・西千葉駅前での拠点形成 ・東大生産研移転後の一部敷地移管の検討	
		・教育学部と附属幼稚園の分離 ・弥生小学校の利活用計画		・移転場所検討	
Campus Sustainability 持続可能性 (S II)	1. エネルギー環境負荷低減	・CO ₂ 排出量削減 ・エネルギー削減 ・エネルギー供給の安定	・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用 ・基幹設備の強化・更新と共同溝の整備	・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用	
	2. 緑地・屋外環境	・緑環境の維持管理 ・屋外交流環境の不足 ・案内サインの不統一	・保全地区の設定 ・通り名称の決定 ・段階的整備計画の立案 ・段階的整備		
	3. 歴史遺産継承	・シンボルの欠如	・やよいの鐘シンボル化		
Campus Safety 安全・安心 (S III)	1. 震災対応	・耐震改修の優先度 ・備蓄庫の未整備 ・停電への対応 ・学内帰宅困難者対策	・体育館、本部庁舎、旧薬学部1号館、講堂、総合校舎G号館、工学部2号棟等の耐震化 ・備蓄庫整備 ・非常電源等の整備 ・地域との連携		
	2. 交通計画	・歩車分離 ・自転車増加・マナー欠如 ・駅前違法駐輪 ・バリアフリー対策 ・西側市道の歩道拡幅 ・西千葉駅前広場の改良	・やよい通り自動車排除 ・駐輪場整備計画の立案 ・やよい通り南端に中門設置 ・段階的な整備	・千葉市との協議 ・千葉市、JRとの協議検討	



西千葉キャンパス航空写真

4-3 亥鼻キャンパス～生命と健康を科学するキャンパス～

(1) 特色を活かす戦略的なキャンパスの実現

Campus Strategy : 亥鼻キャンパスの特色を活かすゾーニング計画

基本整備方針1に基づき、「生命と健康を科学するキャンパス」を支える環境の実現をめざし、その将来ゾーニング計画を立案した。

2011年(平成23年)9月、薬学部の亥鼻キャンパスへの移転が完了し、医学部、看護学部、薬学部、真菌医学研究センター等の健康生命科学分野が集結した。今後、チーム医療への理解と自律した医療組織人育成を目指した専門職連携教育(Inter-Professional Education : IPE)の強化等ますますの協働が期待される。このような教育研究体制を支え、将来にわたって生命と健康を科学する亥鼻キャンパスの骨格(フレームワーク)をつくりあげていくためには、亥鼻キャンパスの現況ゾーニング(図19)が持つ以下の課題を整理し方針を決定しておく必要がある。

第一は、附属病院の機能改善を、長期的視野に立ってどのように行ない、どの場所で再開発を行うかという問題である。

現在の附属病院は、1978年(昭和53年)にキャンパス東側に建設され、すでに完成後30年以上が経過している。建設当初、将来の再開発は現在の運動場部分を利用して行うこととして計画されていた。しかし、その後の医療体制や社会情勢の変化、医療技術の進歩、耐震基準等の見直しによって、現在の場所に新たな病棟(2007年(平成19年)完成)が建設され、新外来棟の建設も決定されている。さらに、今後中央診療棟の改築も計画されている。このような状況を考えると、附属病院の再開発は、現在の場所で段階的に行っていくことが現実的である。



図19 亥鼻キャンパス現況ゾーニング

第二は、キャンパスの地理的形狀によって、附属病院と研究拠点である医学部本館の距離が離れており（約 500m）なんとかそれを解決する方策はないか、という問題である。

この問題は、新規の総合研究棟を、臨床研究拠点としてできるだけ附属病院に近接した場所に建設することで、解決することが可能になる。ただし、今後の医学の発展のためには、臨床研究部門だけでなく、関連した基礎医学研究部門との連携研究拠点となることが望ましい。また、建設場所の選定については、将来の亥鼻キャンパスの骨格に大きな影響を及ぼすことから、運動場の一部使用も視野に入れて様々な角度から検討することが必要である。

第三は、老朽化が進み、機能改善が必要とされている医学部本館（約 35,000 m²）を、教育研究の質を担保しつつ、どのように改修整備していくかという問題である。

医学部本館は 1933 年（昭和 8 年）に田の字型平面の大学病院として着工され、1936 年（昭和 11 年）完成、1937 年（昭和 12 年）に移転を完了した。その後、病院から学部教育研究拠点への機能変更などにもなっており、1980 年（昭和 55 年）前後に大規模な改修や、若干の増築が行われたが、再び全面改修が必要な時期を迎えている。第二の検討課題としてとりあげた新規の総合研究棟建設が実現し、研究機能の多くが移転した場合、医学部本館は亥鼻キャンパス共通のスペースを生む。これを、共同利用の研究施設や、医学部・看護学部・薬学部の IPE 拠点ともなる講義室、セミナー室、カンファレンス室等共同利用の教育施設として整備することによって、歴史遺産でもある医学部本館は機能面においても亥鼻キャンパスのシンボルとなる。

これらの検討に加え、西千葉キャンパスと同様に、交流ゾーン・共同利用ゾーン・教育研究ゾーンの関係を、基本ゾーニングに近づけるべく検討したのが図 20 である。



図 20 亥鼻キャンパス将来ゾーニング

(2) 美しく持続可能なキャンパスの実現

Campus Sustainability : キャンパスの持続可能性

基本整備方針2に基づき、①省エネ・創エネによるエコキャンパスの実現、②緑溢れるキャンパスの維持と交流空間の実現、③歴史遺産の継承、④美しいキャンパスの実現をめざす。

亥鼻の台地には、古く15世紀にさかのぼる地域信仰の対象であった七天王塚が残されており、亥鼻キャンパスにはその内の5つが存在している。1874年(明治7年)千葉市街地に設立された医学部の前身医学校・病院が、1889年(明治22年)亥鼻に移転、居所とした以降も保全されてきた七天王塚は地域住民にも親しまれ、今後も亥鼻キャンパスの歴史、緑のシンボルとして整備、継承していくべきものとする。

亥鼻キャンパスは起伏が大きく教育研究ゾーンと附属病院ゾーンは凡秋谷と呼ばれる谷地によって隔てられている。また、キャンパス周縁部の斜面緑地に関しては、近隣住民から保全と適切な維持管理が求められている。

さらに、正門前に広がる緑も、先達による120年を越える営々とした植樹によるものであり、1936年(昭和11年)完成の医学部本館とともに交流ゾーンを形成する亥鼻キャンパスのシンボルとして、保全整備を行っていく必要がある(図21)。

キャンパスの環境負荷低減の観点から、附属病院のエネルギー平準化のための蓄電池設備(NaS電池)が設けられているが、さらに、再生可能エネルギーや自家発電装置の導入などを含む、多様なエネルギー源の確保を検討し、エネルギーの安定供給を目指すと共に、給排水・情報系を含むライフラインや共同溝の整備を進めていく必要がある。

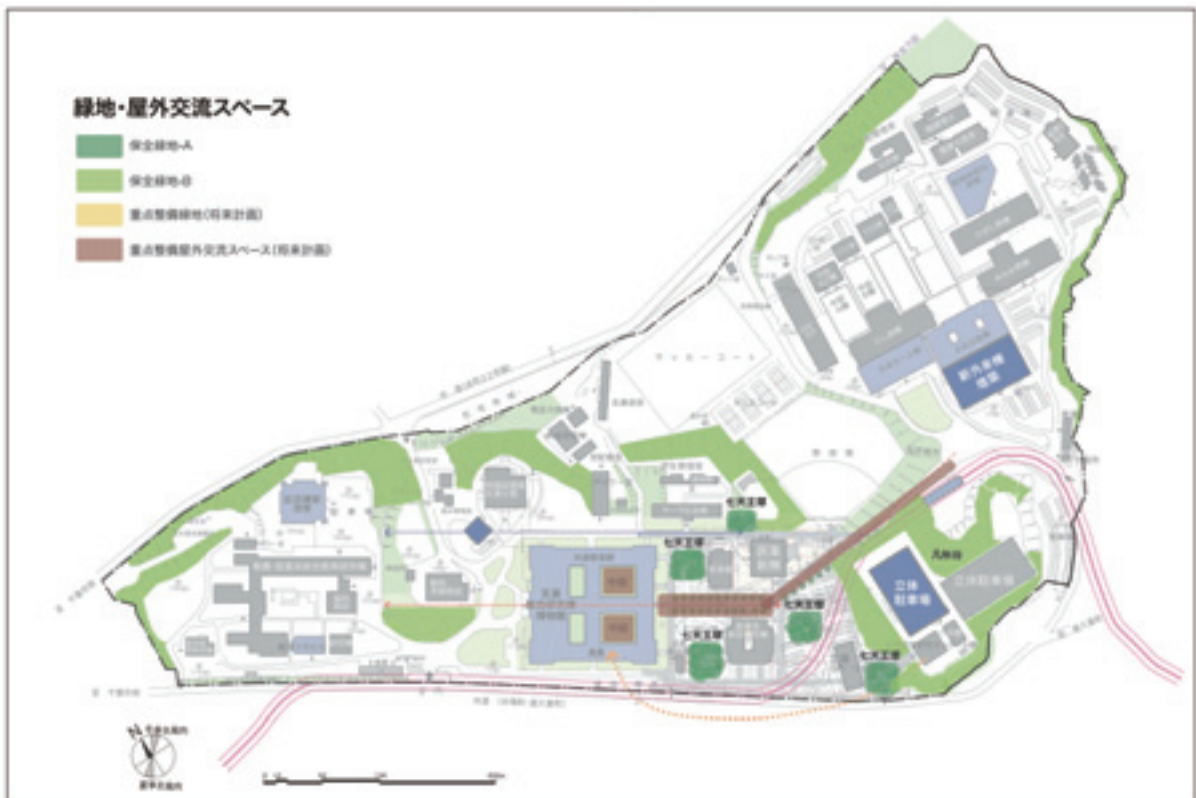


図21 亥鼻キャンパス緑地・屋外交流スペースの検討

(3) 安全安心なキャンパスの実現

Campus Safety : 安全・安心なキャンパス

基本整備方針3に基づき、①災害に強いキャンパスの実現、②事故のない安全・安心なキャンパスの実現をめざす。

耐震性の劣る建物については、今後もこれまで同様に計画的な耐震改修を進めていくが、亥鼻キャンパスのシンボルともいうべき、医学部本館の耐震改修が喫緊の課題になっている。また、医学部記念講堂（1964年（昭和39年）完成の寄付建物）も戦後を代表するモダニズム建築であり、耐震改修による保全が望まれており、施設整備費補助金に頼らない新たな整備手法の検討なども含めて、対策を講じていく必要がある。

交通計画（図22）に関しては、薬学部移転完了による駐車台数・駐輪台数の増加が起こっており、それに対応するための駐車場・駐輪場の整備が必要になっている。さらに、教育研究ゾーンと附属病院との連絡動線が、谷地に設けられた土手状通路だけであることも交通計画上の課題としてあげられる。複数の連絡通路を早い時期に整備し、管理体制や災害時の連絡体制強化につなげることが望ましい。また、モノレール延伸・南側市道拡幅にともなう敷地提供などについては、自治体・関係機関と協議しながら検討を進めていくこととする。

加えて、斜面からの土砂流出や雨水の抑制は、丘陵地にある亥鼻キャンパス特有の課題であり、その対策を十分検討しておく必要がある。

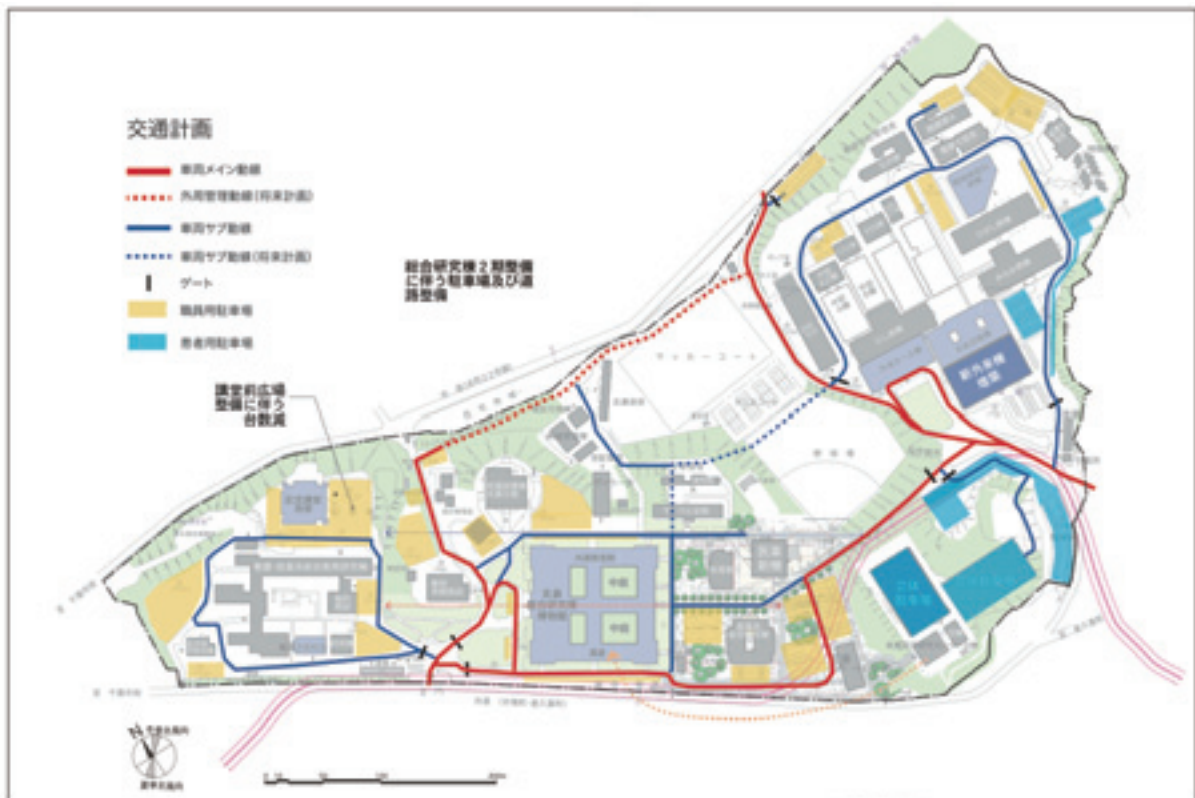


図22 亥鼻キャンパス交通計画の検討

表3 亥鼻キャンパスの課題と対策

亥鼻～生命と健康を科学するキャンパス～				
	項目	課題	中期的な対策	長期的な対策
Campus Strategy キャンパス戦略 (SⅠ)	1. 交流ゾーン	・正門前交流ゾーンの維持	・インフォメーション機能強化 ・正門周辺のユニバーシティパーク整備計画の立案	・亥鼻博物館の整備
	2. 共同利用ゾーン	・共同利用ゾーンの連携強化	・動物実験施設の移転	
		・食堂施設の偏在	・医学部本館改修時の食堂整備	
	3. 教育研究ゾーン	・附属病院再開発場所	・現在地での再開発 ・中央診療棟拡充整備計画	・現在地での再開発
		・附属病院と教育研究スペースの距離解消	・運動場等の一部使用検討 ・新たな研究棟の整備	・将来展開のスペース確保
		・医学部本館の改修手順	・共同スペースの充実等、医学部本館再利用計画の立案	
		・動物実験施設老朽化	・移転場所の検討	
		・老朽施設の機能改善	・看護学部校舎、真菌医学研究センターA棟、亥鼻地区体育館等	
		・IPEの拠点形成	・医学部本館改修による対応	
Campus Sustainability 持続可能性 (SⅡ)	1. エネルギー環境負荷低減	・CO ₂ 排出量削減 ・エネルギー削減 ・エネルギー供給の安定	・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用 ・基幹設備の強化・更新と共同溝の整備	・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用
	2. 緑地・屋外環境	・緑環境の維持管理 ・屋外交流環境の整備 ・案内サインの不統一	・七天王塚の保全 ・正門前緑地の保全 ・段階的整備計画の立案 ・段階的整備	
	3. 歴史遺産継承	・シンボルの維持管理	・医学部本館の保全改修 ・記念講堂の再生整備方針検討	
Campus Safety 安全・安心 (SⅢ)	1. 震災対応	・耐震改修の優先度 ・備蓄庫の未整備 ・停電への対応	・医学部本館、看護学部校舎、医学部記念講堂、真菌医学研究センターA棟、亥鼻地区サークル会館等の耐震化 ・備蓄庫整備 ・自家発電装置整備	
	2. 交通計画	・車・自転車の増加 ・バリアフリー対策 ・校内幹線道路の確保 ・南側道路の拡幅 ・モノレール延伸	・駐車場・駐輪場の整備 ・校内幹線道路の拡充整備計画の立案	・自治体との協議 ・計画凍結解除後の対応
	3. 崖地対策	・豪雨時の隣地への雨水・土砂流出	・北側斜面排水・治山計画の立案	



亥鼻キャンパス航空写真

4-4 松戸キャンパス～食と緑を科学するキャンパス～

(1) 特色を活かす戦略的なキャンパスの実現

Campus Strategy : 松戸キャンパスの特色を活かすゾーニング計画

基本整備方針1に基づき、「食と緑を科学するキャンパス」を支える環境の実現をめざし、その将来ゾーニング計画を立案した。

園芸学部のある松戸キャンパスは、前身である千葉県立園芸専門学校の開校（1909年（明治42年）4月）以来、その骨格を大きく変えることなく現在に至っている。開校当初から、正門はキャンパスの南側を通る国道6号線（水戸街道）に面して設けられており、昭和30年代に建設された建物配置も、それを前提に決定されている。しかし現在は、JR松戸駅からキャンパス北側の住宅地を通る経路がメインアプローチとなっており、それに合わせてキャンパスのフレームワークの見直しを行う必要に迫られている。

現在の北門を、キャンパスの顔（正門）として再整備していくことは、これまでも課題としてあがっていたが、西千葉キャンパスへの学部移転問題が不透明だったこともあって、着手することが事実上困難だった。2009年（平成21年）、学部移転は行わないことを決定したことから、松戸キャンパスのフレームワークを見直すことが可能になり、今回のキャンパスマスタープラン策定にあたっては、その点を第一に検討していくこととした。

また、園芸学部創立100周年記念として戸定が丘ホール（寄付建物）が2011年（平成23年）11月に完成し、今後その東側の屋外空間の整備計画（創立100周年記念事業による公開コンペ）も立案されていることから、現北門周囲を交流ゾーンとして再整備することで、松戸キャンパスのシンボルとなる屋外空間が整備できると考えた。

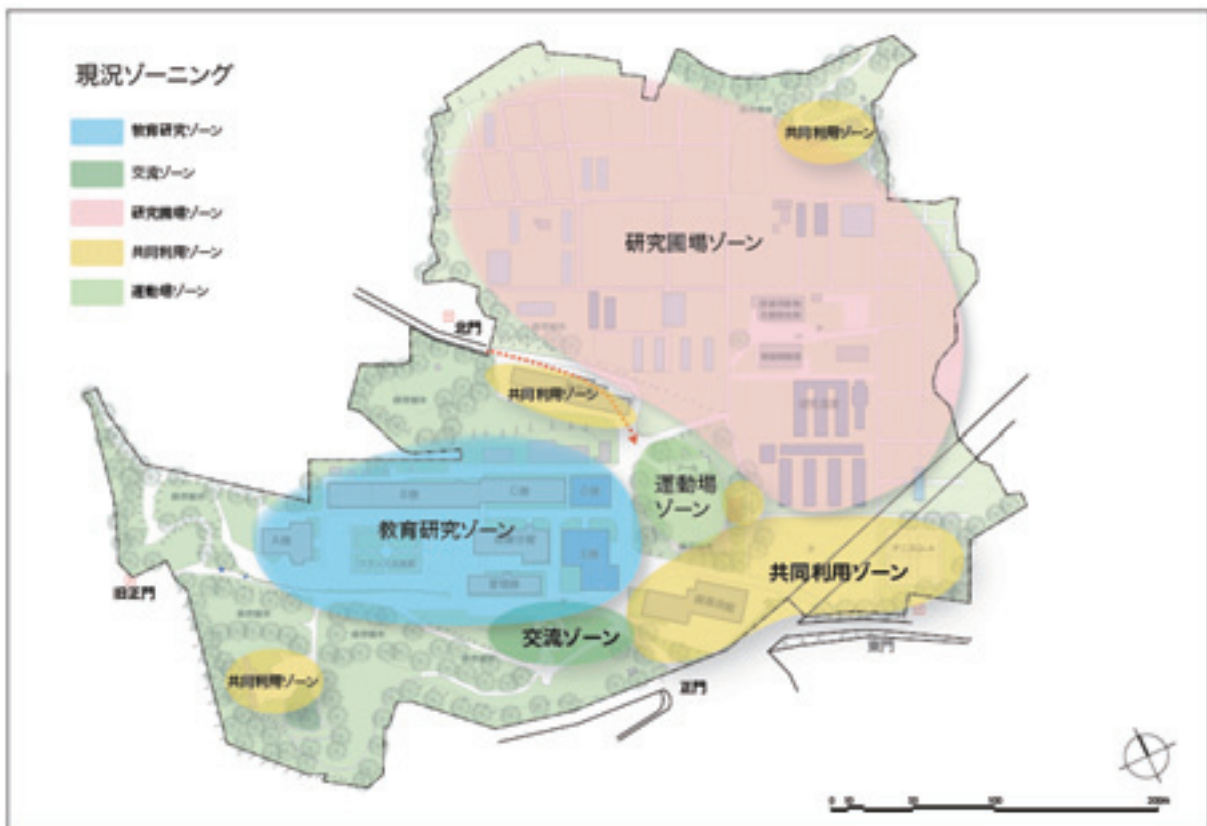


図 23 松戸キャンパス現況ゾーニング

現況のゾーニング（図 23）では、メインのアプローチである北門を入ると、まず目に飛び込んでくるのは学生寮（浩気寮）であり、この場所から松戸キャンパスの教育研究戦略を感じることはできない。まずこの点を改良し、さらに狭隘な教育研究スペースの解消を図るために、C・D棟の北側を総合研究棟の建設場所に設定した。ここに防犯対策チェック機能とインフォメーション機能を持たせるとともに、将来は学生寮の移転を行い、現北門周辺に 100 周年記念広場と連続する交流ゾーンを形成することが可能になる。

また、現在 100 周年記念広場予定地にあるテニスコートやプールなどの運動施設の移転場所、また、今後進展が期待される植物工場関連研究スペース確保のため、研究圃場ゾーンの一部を、将来の運動場ならびに教育研究ゾーンとしている（図 24）。



図 24 松戸キャンパス将来ゾーニング

(3) 安全安心なキャンパスの実現

Campus Safety : 安全・安心なキャンパス

基本整備方針3に基づき、①災害に強いキャンパスの実現、②事故のない安全・安心なキャンパスの実現をめざす。

松戸キャンパスでは、約 28,000 m²の延床面積の内 15%にあたる約 4,200 m²の建物（D棟、学生寮など）の耐震改修が未了である。2012年度（平成24年度）にはD棟の耐震改修が予定されており、耐震性の劣る建物については、今後もこれまで同様に計画的な耐震改修を進めていく予定である。また、松戸キャンパスのシンボルともいえるべき1935年（昭和10年）完成の鑑賞温室は、老朽化が進んでいることもあり、保存改修するか、新規に建て直すかの検討が必要である。

松戸キャンパスは老朽化によって機能改修が必要な建物が57.7%を占め、他キャンパスに比べ突出している。温室等圃場施設を有する事情があるものの、教育研究活動の妨げとなる施設については改修や建て替えの必要がある。

交通計画に関しては、駐車台数・駐輪台数ともに現在のところ大きな問題は起きていない。

現在の北門を正式に松戸キャンパスの正門として位置づけ、合わせて他の門の名称を変更することとする（図26）。

また、斜面地の緑の保全と共に、斜面からの土砂流出や雨水の抑制は、亥鼻キャンパスと同様に丘陵地にある松戸キャンパス特有の課題であり、その対策を十分検討しておく必要がある。

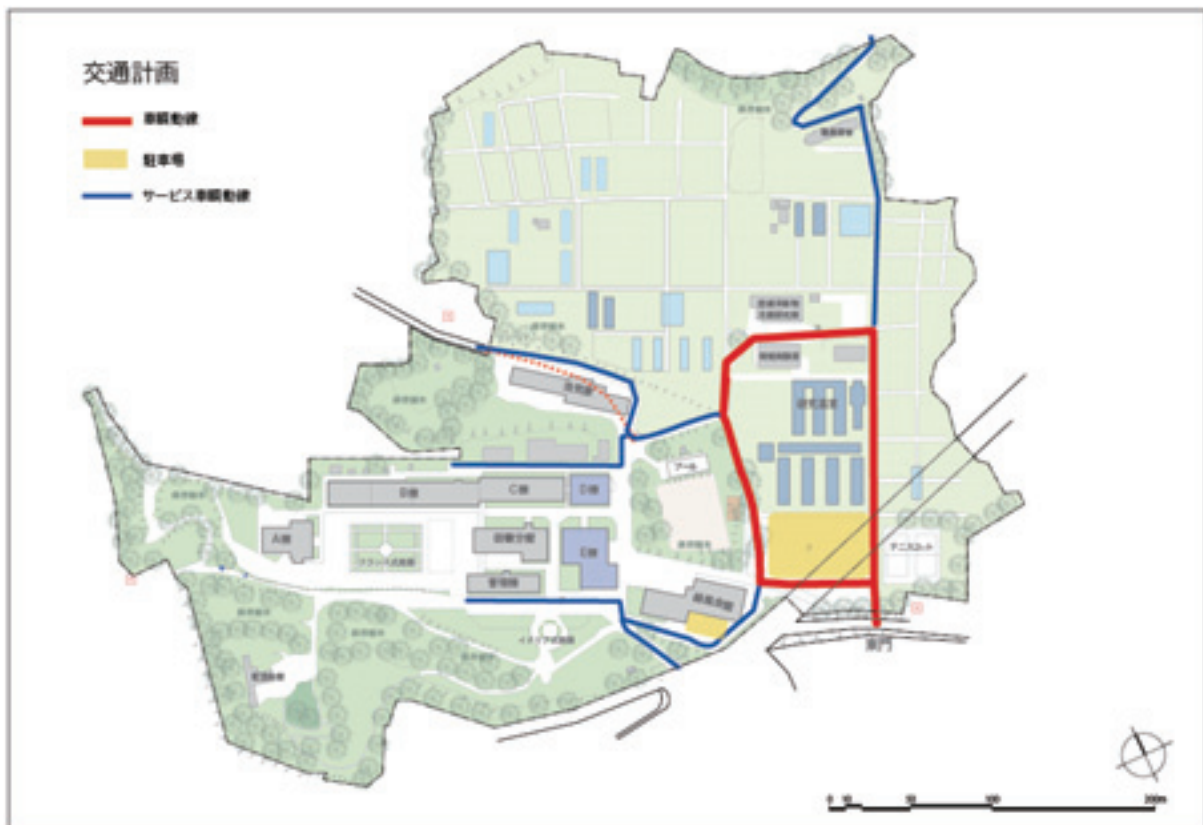


図26 松戸キャンパス交通計画の検討

表4 松戸キャンパスの課題と対策

松戸～食と緑を科学するキャンパス～				
項目	課題	中期的な対策	長期的な対策	
Campus Strategy キャンパス戦略 (S I)	1. 交流ゾーン	・北門周辺の交流ゾーン欠如 ・戸定が丘ホール前の屋外環境整備	・新研究棟建設に合わせたインフォメーション機能強化と周辺環境整備計画の立案	・浩気寮の移転検討
	2. 共同利用ゾーン	・図書館、緑風会館の老朽化		・住居系施設の整備のあり方
		・学生寮・職員宿舎の老朽化		
	3. 教育研究ゾーン	・狭隘な教育研究スペースの解消	・新研究棟の建設 ・西千葉キャンパスの利用	
		・圃場のスペース有効利用	・共同利用ゾーンへの一部転用	
		・老朽施設の機能改善	・A棟、E棟、生物・科学実験室、緑風会館、図書館松戸分館等	
Campus Sustainability 持続可能性 (S II)	1. エネルギー環境負荷低減	・CO ₂ 排出量削減 ・エネルギー削減 ・エネルギー供給の安定	・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用 ・基幹設備の強化・更新	・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用
	2. 緑地・屋外環境	・緑環境の維持管理 ・敷地境界樹木の管理 ・ ・屋外交流環境の整備 ・案内サインの不統一	・維持管理費の捻出 ・緑の整理 ・松戸市との連携 ・整備計画の立案	
	3. 歴史遺産継承	・シンボルとしての緑の維持	・維持管理費の捻出 ・松戸市との連携	
Campus Safety 安全・安心 (S III)	1. 震災対応	・耐震改修 ・備蓄庫の未整備 ・停電への対応	・備蓄庫整備 ・非常電源等の整備	・住居系施設の整備の在り方
	2. 交通計画	・正門位置の変更 ・バリアフリー対策	・門名称の変更	
	3. 崖地対策	・豪雨時の隣地への雨水・土砂流出 ・敷地境界	・雨水排水計画・治山計画の立案と要求 ・隣地境界整備	



松戸キャンパス航空写真

4-5 柏の葉キャンパス～環境・健康・食の学際研究キャンパス～

(1) 特色を活かす戦略的なキャンパスの実現

Campus Strategy : 柏の葉キャンパスの特色を活かすゾーニング計画

柏の葉キャンパスは、柏市が推進する周辺地域のまちづくり構想（柏の葉国際キャンパスタウン構想）と密接な関係にあることが大きな特徴である。この構想は、柏市、千葉県、東京大学、千葉大学の4者が共同で策定したもので、千葉大学柏の葉キャンパスは、市民生活に密着した食と健康の教育研究拠点であり、都市型農業の今後のあり方の実践研究拠点として位置づけられている。

キャンパスは、1991年（平成3年）に園芸学部附属農場として設置された比較的新しいキャンパスであり、環境健康フィールド科学センターへの組織替えと、つくばエクスプレス開業に伴う周辺環境の変化に対応するため、2005年（平成17年）にフレームワークプランが作成され、現在もその骨格に大きな変更はない。

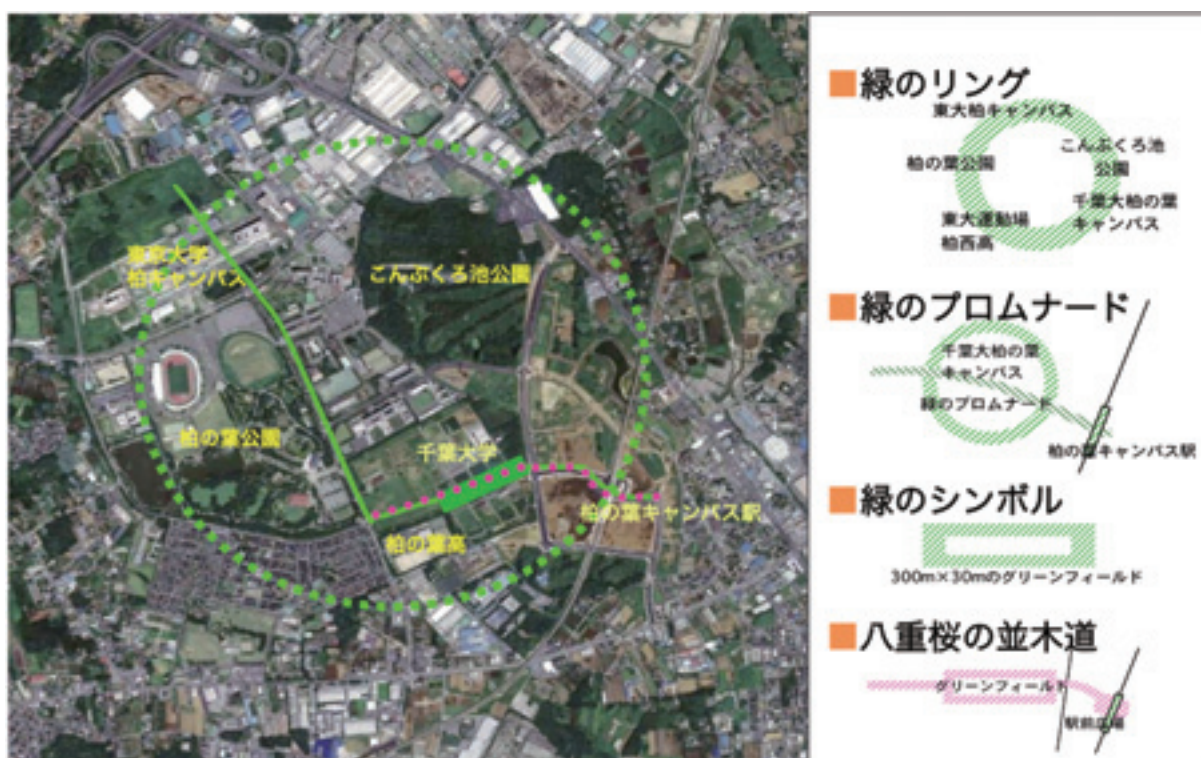
基本となる考え方は、

- キャンパス外の周辺の緑地資源と共に全体として大きな緑のリングの実現に寄与する。
- 柏の葉キャンパス駅から県立柏の葉公園に向かう緑のプロムナードの形成に寄与する。
- キャンパスの緑のシンボルとしてグリーンフィールドを形成する。
- 地域の自然景観資源となる八重桜の並木道を実現する。

の4点である（図27）。

その後、ケミレスタウン・プロジェクトの進行、植物工場の新設にともなう旧調整池の廃止、北門の移動などを加えた将来像とゾーニングを図28と図29に示す。

なお、千葉大学柏の葉キャンパスは、柏市・千葉県・東京大学・千葉大学の4者が共同で策定した「柏の葉国際キャンパスタウン構想」の中で、都市近郊農業の今後のあり方や、地域密着型の予防医学を実証研究する地域拠点として位置づけられている。



(2) 美しく持続可能なキャンパスの実現

Campus Sustainability : キャンパスの持続可能性

基本整備方針2に基づき、①省エネ・創エネによるエコキャンパスの実現、②緑溢れるキャンパスの維持と交流空間の実現、③歴史遺産の継承、④美しいキャンパスの実現をめざす。

環境負荷低減のためには、特に、以下の2点の改善を行っていく必要がある。第一に、2011年（平成23年）10月から植物工場が本格的に稼働したため、今後使用電力の大幅な増加が見込まれる。植物工場の研究プロジェクト自体が省エネを目標にしていることもあり、研究成果を着実に反映していく必要がある。第二に、排水基準を監視するために、計測装置等の整備を計画的に行う必要がある。

緑の保全・維持に関しては、特にシンボルとして整備していくグリーンフィールドと八重桜並木、さらに東大と共同で整備予定の柏の葉スクエアの維持・管理が課題としてあげられるが、柏市や柏の葉キャンパスで展開されているカレッジリンクプログラム修了生との連携により、大学と地域が共同して新しい緑の維持管理手法を構築していく必要がある（図30）。



図 30 柏の葉キャンパスキャンパス緑地・屋外交流スペースの検討

(3) 安全安心なキャンパスの実現

Campus Safety : 安全・安心なキャンパス

基本整備方針3に基づき、①災害に強いキャンパスの実現、②事故のない安全・安心なキャンパスの実現をめざす。

特に柏の葉キャンパスでは、植物工場関係者や訪問者の増加に伴う自動車・自転車の増加がみられるため、一部道路の拡幅・舗装と併せて、駐車場・駐輪場の整備を進める必要がある。また、交通事故防止のためグリーンフィールドに沿った部分は自動車の通行を禁止して一層の安全確保を行う者とする(図31)。

また、グリーンフィールド北側に展開する圃場や植物工場へ、関係者以外の立ち入りができないようにゲート等を設けて盗難や事故の発生を防止するものとする。

東京電力福島第一原子力発電所の事故により放出された放射性物質による環境汚染への対応については、今後策定予定の柏市の計画にもとづき、キャンパス内の放射線測定等を実施し、必要な箇所に対しては柏市と協議しながら適切な措置を行うものとする。



図31 柏の葉キャンパス交通計画

表5 柏の葉キャンパスの課題と対策

柏の葉～環境・健康・食の学際研究キャンパス～				
項目		課題	中期的な対策	長期的な対策
Campus Strategy キャンパス戦略 (SⅠ)	1. 交流ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・グリーンフィールド整備手法 ・八重桜並木維持管理手法 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携 ・カレッジリンクプログラムの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域との連携 ・カレッジリンクプログラムの活用
	2. 共同利用ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・展示温室 		
	3. 教育研究ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・ケミレスタウン施設の活用方法 ・植物工場の展開 ・学生利用スペースの確保 	<ul style="list-style-type: none"> ・一部を研修宿舎として活用 ・他大学・企業の技術研修受入れ ・現有施設の有効利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・薬用植物等対象作物の拡大を検討 ・新規厚生施設の検討
Campus Sustainability 持続可能性 (SⅡ)	1. エネルギー環境負荷低減	<ul style="list-style-type: none"> ・CO₂排出量削減 ・エネルギー削減 ・排水基準 	<ul style="list-style-type: none"> ・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用 ・pH測定装置の整備 	<ul style="list-style-type: none"> ・省エネ機器の採用 ・再生可能エネルギーの採用
	2. 緑地・屋外環境	<ul style="list-style-type: none"> ・東側排水路の共同整備 ・緑環境の維持管理 ・屋外交流環境の整備 ・案内サインの不統一 ・野馬土手の復活 	<ul style="list-style-type: none"> ・柏市・千葉県との連携 ・維持管理費の捻出 ・柏市との連携 ・柏の葉スクエアの整備 ・段階的整備 ・千葉県・柏市との共同整備 	
	3. 歴史遺産継承	<ul style="list-style-type: none"> ・シンボルとしての緑の維持 	<ul style="list-style-type: none"> ・柏市との連携 ・カレッジリンクプログラムの活用 	
Campus Safety 安全・安心 (SⅢ)	1. 震災対応	<ul style="list-style-type: none"> ・備蓄庫の未整備 ・停電への対応 ・放射性物質への対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・備蓄庫整備 ・非常電源等の整備 ・自治体との協議 	
	2. 交通計画	<ul style="list-style-type: none"> ・自動車・自転車の増加 ・圃場部分のセキュリティ ・市民の通行利用 	<ul style="list-style-type: none"> ・駐車場・駐輪場整備 ・グリーンフィールド北側のゲート整備 ・道路の拡幅・舗装整備 ・自治体との協議 	



柏の葉キャンパス航空写真

理念と目標 (千葉大学憲章)

千葉大学の理念

つねに、より高きものをめざして

千葉大学は、世界を先導する創造的な教育・研究活動を通しての社会貢献を使命とし、生命のいっそうの輝きをめざす未来志向型大学として、たゆみない挑戦を続けます。

千葉大学の目標

私たち役員と教職員は、上記の理念のもと、自由・自立の精神を堅持して、地球規模的な視点から常に社会とかかわりあいを持ち、普遍的な教養(真善美)、専門的な知識・技術・技能および高い問題解決能力をそなえた人材の育成、ならびに現代的課題に応える創造的、独創的研究の展開によって、人類の平和と福祉ならびに自然との共生に貢献します。

1. 私たちは、学生が個々の能力を発揮して「学ぶ喜び」を見だし、鋭い知性と豊かな人間性を育んでいく自律成長を支援するために、最高の教育プログラムと環境を提供します。千葉大学は、学生と私たちがともに学ぶ喜びを生きがいと感じ、ともに成長していく知的共同体です。
2. 私たちは、学生とともに、社会で生じるさまざまな問題の本質を、事実を踏まえて深く考察し、公正かつ誠実な問題解決に資する成果を速やかに提供して、社会と文化ならびに科学と技術の発展に貢献します。
3. 私たちは、総合大学としての多様性と学際性を生かし、国内外の地域社会・民間・行政・教育研究諸機関と連携して、領域横断的研究と社会貢献を積極的に推進します。
4. 私たちは、各人の個性・能力・意欲および自主性が継続的に最大限発揮され、意欲ある人材が積極的に登用される仕組みと環境を構築し、時代の変化に応じて柔軟に大学を運営します。

2005年10月11日 制定

2004年4月1日 制 定
2008年4月1日 改訂2版

千葉大学環境方針

わたしたち人類は、産業革命以来、大量の資源エネルギーを用いてその活動を発展させてきました。その結果、地球の温暖化、化学物質汚染、生物多様性の減少など、さまざまな環境問題に直面しています。まさに、人間活動からの環境への負荷によって人類の存続の基盤となる環境がおびやかされています。新しいミレニアムの初頭にあって、これからの千年にわたり今の文明を持続させるために何をすべきか、真剣に考え、英知を結集させるべきです。

千葉大学は、理系分野と文系分野の双方の幅広い分野を含む総合的な教育・研究機関として、この英知の形成と集積と実践に寄与していく責務があります。このため、とくに次の事項を推進していきます。

1. 文系と理系の知恵を集積し、また附属学校と連携し、総合大学としての特長を活かした環境教育と研究の実践を進めます。
2. 省エネルギー・省資源、資源の循環利用、グリーン購入を推進し、化学物質の安全管理を徹底します。また、構内の緑を保全します。これらにより環境負荷の少ない緑豊かなキャンパスを実現します。とくに、環境に関連する法規制や千葉大学が同意する環境に関する要求事項を理解し、遵守します。
3. 環境マネジメントシステムの構築と運用は学生の主体的な参加によって実施します。また、学生による自主的な環境活動を推奨し、多様な環境プログラムが実施されるキャンパスを目指します。
4. 環境マネジメントシステムを地域の意見を反映させながら、地域社会に開かれた形で実施していきます。

千葉大学では、この環境方針に基づき目標を設定し、その実現に向けて行動するとともに、行動の状況を監査して環境マネジメントシステムを見直します。これにより、継続的にシステムの改善を図り、汚染を予防します。

また、この環境方針は文書化し、千葉大学の教職員、学生、常駐する関連業者などの関係者に周知するとともに、文書やインターネットのホームページを用いて一般の人に開示します。

2008年4月1日

千葉大学長
齋藤 康

付3) キャンパスマスタープラン2012 検討の経緯

平成22年 7月16日	第1回キャンパスマスタープラン検討WG
平成22年 9月21日	第2回キャンパスマスタープラン検討WG
平成22年11月17日	第1回亥鼻地区検討部会
平成22年11月18日	第1回松戸地区検討部会
平成22年11月18日	第1回柏の葉地区検討部会
平成23年 1月20日	第3回キャンパスマスタープラン検討WG
平成23年 6月 2日	第4回キャンパスマスタープラン検討WG
平成23年 6月 3日	第1回学内部局意見照会
平成23年 8月31日	第2回松戸地区検討部会
平成23年 8月31日	第2回柏の葉地区検討部会
平成23年 9月21日	第1回西千葉地区検討部会
平成23年 9月22日	第2回亥鼻地区検討部会
平成23年 9月28日	第2回学内部局意見照会
平成23年11月15日	第1回亥鼻地区検討部会医学部検討WG
平成23年12月 6日	役員意見照会
平成23年12月 6日	第2回亥鼻地区検討部会医学部検討WG
平成24年 1月10日	部局長連絡会にて素案説明
平成24年 1月11日	学内意見募集(～1月31日)
平成24年 2月16日	第5回キャンパスマスタープラン検討WG
平成24年 2月27日	役員打合にて説明
平成24年 3月 8日	部局長連絡会にて説明
平成24年 3月15日	教育研究評議会にて承認
平成24年 3月21日	役員会にて承認
平成24年 3月23日	事務協議会にて説明
平成24年 3月27日	経営協議会にて報告
平成24年 3月末以降	公表(ホームページ等)

付4) キャンパスマスタープラン 2012 検討ワーキンググループ委員

	氏名	所属
主査	山本 恵司	理事 (企画担当)
キャンパス整備企画室 施設環境部	上野 武	キャンパス整備企画室長
	小山 薫	施設環境部長
	大西 功容	施設環境部施設企画課長
	鈴木 雅之	キャンパス整備企画室
西千葉地区検討部会	柳澤 清一	文学部
	山田 哲弘	教育学部 (教育学研究科)
	中原 秀登	法経学部
	小堀 洋	理学研究科 (理学部) ~平成 23 年 3 月
	田村 隆明	理学研究科 (理学部) 平成 23 年 4 月~
	岩永 光一	工学研究科 (工学部)
	村松 成司	人文社会科学研究科 ~平成 23 年 3 月
	神戸 和昭	人文社会科学研究科 平成 23 年 4 月~
	青木 直和	融合科学研究科
	金原 恭子	専門法務研究科
	野澤 宗平	普遍教育センター
	近藤 昭彦	環境リモートセンシング研究センター
亥鼻地区検討部会	瀧口 正樹	医学研究院 (医学部)
	村山 俊彦	薬学研究院 (薬学部)
	酒井 郁子	看護学研究科 (看護学部)
	山本 修一	医学部附属病院
	亀井 克彦	真菌医学研究センター
松戸・柏の葉地区検討部会	松岡 延浩	園芸学研究科 (園芸学部)
	宮崎 良文	環境健康フィールド科学センター
キャンパス整備企画室兼任室員	小林 秀樹	(工学研究科)
	瀧口 正樹	(医学研究院) 亥鼻地区検討部会
	藤井 英二郎	(園芸学研究科)
	栗生 明	(工学研究科)
	倉阪 秀史	(法経学部)
	川瀬 貴晴	(工学研究科)

千葉大学キャンパスマスタープラン 2012
2012年3月初版1刷発行

企画・編集
キャンパスマスタープラン検討ワーキンググループ
キャンパス整備企画室
施設環境部

発行者
国立大学法人 千葉大学
〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33
TEL : 043-290-2123

千葉大学ホームページ
<http://www.chiba-u.ac.jp>

千葉大学キャンパス整備企画室
<http://www.chiba-u.ac.jp/campusplanning>

<http://www.chiba-u.ac.jp/campusplanning/>



千葉大学
Chiba University

Campus Master Plan 2012

国立大学法人 千葉大学
〒263-8522
千葉県千葉市稲毛区弥生町1-3-3

